

新たな歴史観を求めて

安 田 明 弘*



最近「歴史観」という言葉がマスコミを賑わしたのは、例の田母神前航空幕僚長の懸賞論文に関する一連の事案に関してであった。その論文の内容が政府見解と著しく異なる歴史観に基づいたものであるとか、また、田母神氏が統合幕僚学校長時代に新設した「歴史観・国家観」という講座が政府見解と異なる偏向した歴史観を教えているとかといったことが、シビリアンコントロールの観点から問題となったものである。

この場合の「歴史観」は、主として過去の歴史の見方、解釈というような意味で用いられているように思われるが、「歴史観」という言葉を広辞苑で引いてみると、「歴史的世界の構造やその発展についての一つの体系的な見方。」となっているように、過去のことでだけでなく未来をも見据えた広がりのある概念であることが分かる。

私達日本人はつい最近まで、必ずしも明確に自覚していた者はそれほど多くなくても、ほとんどの者が人間中心の進歩史観を心に抱いて暮らしてきたものと思われる。進歩史観にはご承知のとおり、自由主義的な進歩史観とマルクス主義の唯物史観という二つの系譜があるが、いずれにしても、南山大学の野田宣雄教授も述べられているように、「近代進歩史観への信奉とそれを前提とした人生設計が、日本人の間でもっとも普及したのが、1970、80年代であったということになる。このころになると、日本は国際的にもアメリカに次ぐ世界第二の経済大国という評価を受け、個々の日本人の日常生活も、ほんの二、三十年前と比較して信じがたいほど豊かになった。・・・自分たちの生活が目に見える形で豊かになりつつあるとすれば、日本人の大多数が、科学・技術の発達を基礎においた近代進歩史観を素直に受け入れたとしても、なんら不思議ではない。」(『歴史をいかに学ぶか』、PHP新書)という状況であったと思われる。

しかし、野田教授も既に指摘しているとおり、我が国のみならず他の先進諸国でも常識と言えたこの進歩史観は、ほとんど崩壊してしまったと言っても過言で

はないような現状に立ち至っているのではないだろうか。

戦後すぐの時期を除き毎年のように行われてきた「国民生活に関する世論調査」(内閣府)の中に、今後の生活の見通しを聞く設問がある。これに対する回答は、野田教授の記述を裏付けるかのように、1970、80年代には「良くなっていく」とするものが「悪くなっていく」とするものをほぼ一貫して凌駕していたのが、1994年には逆転され、その後かなり水を空けられるようになり、昨年6月の調査では遂に30ポイント近い差を付けられるようになってしまった。リーマン・ブラザーズの破綻が9月であったから、それ以降にこの調査が行われていれば、この差はもっと大きく開いていたはずである。今回の景気の崩落は、まさに進歩史観にとどめを刺したと言えるのかもしれない。

最近問題となっている様々な事象や時代の閉塞感といったことも、このような歴史観の喪失が背景にあると思われるのである。それでは、進歩史観に替わる新たな歴史観とは何であろうか。野田教授は、前掲書の中でブルクハルトの歴史観にそのヒントを求めているが、私が最も共感を覚えるのは国際日本文化研究センターの安田喜憲教授が提唱する、自然と人間が共存可能な「環境史観」である。昨年12月5日に開催した寒地土木研究所講演会においては、同教授に特別講演をお願いし、直接ご高説を伺う機会を得ることができた。

ローマクラブは37年前に『成長の限界』を発表し、現代文明の崩壊を警告したが、安田教授は環境考古学による精緻な分析に基づき、そのような悲劇的事態を回避するためには、縄文時代以来の「森の民の歴史観」であり、弥生時代以来の「稲作漁撈民の歴史観」である「環境史観」への歴史観の転換が必要であると、その著書『気候変動の文明史』の中で結論付けている。地球環境の危機が叫ばれる昨今、時代に適う歴史観としてこの「環境史観」が相応しいことに、多くの人々の賛同が得られるのではないだろうか。

(独)土木研究所 寒地土木研究所 監査役*